

研究課題	マーガレット・フラーからゾラ・ニール・ハーストン、スーザン・ソントグにいたるソーシャル・リフォームと理想構築の言説に関する研究
研究代表者	伊藤 淑子 (文学部 人文学科 教授)

1. 研究目的

本研究の目的は、『19世紀の女性』を主著とするマーガレット・フラーの社会改革の言説の系譜を、20世紀はじめのゾラ・ニール・ハーストン、そして20世紀後半から21世紀のスーザン・ソントグへと結ぶことである。28年度はとくに、1960年代から2004年に没するまで、アメリカ言論界を代表する批評家/作家の一人であったスーザン・ソントグに焦点を当て、フェミニズム、脱構築、ポストモダニズムなど思潮の激しい変節のなかで、ソントグがどのように時代を牽引し、独自の言説を切り開いたのかを、通時的かつ共時的に探り出す。ソントグの文学作品と思想を、フラーのフェミニズムやアメリカ的思想の継承と否定の両面から分析する。

遡ればニーナ・ベイムの『女性の小説』の初版が1978年に出版されたことは、アメリカ文学史のキャンオンを読み直す画期的な契機であり、1993年に出された第二版の序文に、ベイム自身がかいているように、1978年以降、女性作家の作品の再評価が急速に進展している。しかし、そのなかでマーガレット・フラーが逸早く注目を集めたわけではない。フラーが小説家としてではなく超絶主義の論客、そしてジャーナリストとしてキャリアを積み重ねたこと、フラーの表現や内容がわかりにくいことがその要因であるのかもしれない。ようやく近年になって、2012年、2013年と相次いで本格的な評伝がアメリカで出版され、フラーの再評価の波が高まっているところである。国内においては、超絶主義の文脈でフラーを読み解く試みはなされているが、フラーが実際の運動からは遠ざかっていたこともあり、十分な分析はまだ行われていない。

メアリ・ウルストンクラフトがヨーロッパにおける女性の権利運動のパイオニアとみなされるように、フラーはアメリカにおいてフェミニズムの立場からソーシャル・リフォームを唱えたパイオニアであると評価されるべきだと申請者は考えている。文学と女性史をクロスさせることによって、女性であることの制約の利点への変換、ソーシャル・リフォームと理想構築の言説の生成と継承について、新たな視野を見出すことができると考える。

本研究の最終段階として、28年度にとくに焦点をあてたスーザン・ソントグは、20世紀後半の言論界において常に注目を集める存在であったが、生涯にわたる執筆活動の業績を総合的に分析する研究は、国内外においてまだ進んでいない。日記を含む遺稿が編集出版され、一次資料にアクセスしやすくなっているが、学術誌に掲載された論文やアメリカの主要な大学の博士論文を検索してもソントグを中心におくものはわずかであり、体系的な研究成果はまだ発表されていない。

またソントグの批評の前衛性に対する評価にくらべて、小説や戯曲など文学的な創作に対する検証は十分に行われてこなかった。多方面に活発な発言を残し、さまざまなメディアに執筆活動を行ったソントグの仕事の意味を、批評と文学の両面から探る作業は、十分に着手されているとはいえない。

マーガレット・フラーが描いた社会の理想像を、フラー自身のキャリア意識の形成とあわせて研究してきた。超絶主義のなかで文学と批評を書き、ジャーナリストとしてキャリアを積んだフラーは、文学的想像力をフェミニズムと社会批評に交差させる。フラーは女性であることによって受ける制約を、むしろ利点へと論理的に変換し、社会批判と理想構築の戦略としたことをこれまでの研究で明らかにした。

その上で平成 27 年度には、フラーとの関連性からゾラ・ニール・ハーストンとスーザン・ソントグを分析した。フラーを研究するなかで芽生えたのが、フラーの主張を継承する者はだれか、という問いであり、文学と批評の表現方法を共存させたフラーの論理的戦略の系譜をハーストンとソントグにたどる研究を進めている。フラー、ハーストン、ソントグに共通するのは、周辺に置かれた者の視点でそれぞれの時代の現状を批判的にとらえようとしたことと、文学と批評という二つの表現方法を用いたことである。フラーの論じる女性の疎外と結婚によって達成される自己の充足はハーストンの描く黒人女性の問題に通じ、フラーの説く共感の可能性はソントグのフェミニズムへと引き継がれていることを明らかにする研究に取り組む。

平成 28 年度は研究の最終段階として、ソントグの批評の先端性と文学がどのような意義をもつものであるのか、以下の 4 点に注目し、さらに深く探究することを目指す。フラーを戯画的に登場させるソントグの戯曲 *Alice in Bed* を比較文学的に論じ、主軸をソントグの批評と創作的実践に移し、ソントグの残した言論の全体的な研究を行いたい。それはソントグの研究であると同時に、1960 年代から 21 世紀にいたる思潮の波のなかでフェミニズムがどのように普遍的な主張と表現を獲得したかということを知ることであり、歴史という集合的な記憶をどのように個人が引き受けられるか、個人の経験がどのように文化的に共有されるかを問うものである。

(1) ソントグのジェンダー意識の所在

ソントグの著作のなかで *Alice in Bed* はこれまで注目されてこなかったが、ソントグが文化批評や芸術批評で述べていることを映し出す作品として、きわめて興味深い作品であり、本研究の第一段階として、これまでの申請者の研究成果をふまえ、ジェンダーの視点からこの戯曲の意義を明らかにする。ソントグは“Notes on ‘Camp’”で斬新な文化論を繰り広げるが、戯曲そのものが「キャンプ」な表現実践であるともいえる。19 世紀のアメリカのフェミニズムの先駆者ともいえるフラーを容赦なく「キャンプ」な存在として登場させ、アリスに何重ものペルソナを引き受けさせる。ソントグがその他の著作においてフェミニズムを全面に出すことは稀であるが、この戯曲は女性の苦悩を描く目的で書いたソントグ自身があとがきで説明している。

(2) ソントグの小説におけるアイデンティティと記憶の関係性

ソントグは *Alice in Bed* において女性であるがゆえに自我の掌握に苦悩するアリスを描くが、アイデンティティの探究はソントグの他の主要な文学作品のテーマでもある。すべての小説を研究対象にするが、*I, etcetera* の“Project for a Trip to China”と *The Volcano Lover* をとくに丁寧に論じ、ソントグの文学テーマにおけるアイデンティティと記憶の関係性を明らかにする。

(3) ソンタグにおける集合的記憶の個に対する作用

ソンタグの批評と文学作品をつなぐ一つのキーワードが記憶であると申請者は予測している。哲学や心理学の成果も利用して、*Illness and Metaphor*(1978)、*AIDS and Its Metaphors*(1988)、*Regarding the Pain of Others* (2003)を中心に、個人の経験や記憶に対する集合的記憶の作用をソンタグがどのようにとらえていたかを学際的に明らかにする。

(4) ソンタグにおける共感の可能性

集合的記憶と個の記憶の作用からどのような他者との関係が生まれうるとソンタグが考えていたのかを分析し、共感へのソンタグの期待を明らかにする。*Regarding the Pain of Others*は他者との共感の不可能性を論じつつ、研ぎ澄まされた個としての意識があれば共感は生まれうると限定的な可能性を示唆しているようにも考えられる。これを証明することができれば、ソンタグの前衛的な文化批評は、精神性において超絶主義的アメリカの思想の系譜に連なるものとなる。

2. 研究方法

本研究の取り組みとして、次のように段階を設けた。

- (1) 第一段階として、フラーの著作から、人種に関する記述を抜き出し、人種がどのように自由の実現を阻んでいるとフラーが考えていたのかを明らかにする。
- (2) 第二段階として、ハーストンの著作と発言から、アメリカ社会の現状批判を読み解くと同時に、どのような社会を理想としていたのか、ということをあきらかにする。
- (3) 第三段階として、ソンタグの著作、発言から、とくにジェンダーと人種に関係の深いものを選び、それを分析することによって、ソンタグの批判の所在と理想的な社会像をあきらかにする。
- (4) 研究の最終段階として、フラーからハーストン、ソンタグへと、どのような異議申し立てと理想の希求の継承および変遷があったのか、ということを明らかにする。

平成 26 年度に第一段階と第二段階に取り組み、平成 27 年度は第三段階に着手した。本研究を完成するために、平成 28 年度は研究の集大成に努める。ソンタグの著作を一次資料とし、脱構築的にテキスト分析を行う。雑誌や新聞に掲載された記事、インタビュー録画なども一次資料として資料収集する。二次資料としてアメリカ文学に関する文献の他に、哲学、批評理論の文献を活用し、ソンタグへの影響を比較分析し、ソンタグの独自性を検証する。

3. 研究成果と公表

(1) 研究発表

本研究に関連して、フェミニズムの系譜という視点から、以下の発表を行った。

“A Comparative study of European and American Influences on the Early Japanese Feminism”
(2016年7月 International Comparative Literature Association)

また、フェミニズムのアイコンとしてのマーガレット・フラー像について、2017年5月に Boston で開催される American Literature Association の大会で、Margaret Fuller Society のパネルで発表することになっている。

(2)論文

本研究で得られた視点から、以下の論文をまとめた。

『緋文字』におけるヘスターの演技と緋文字」(『大正大学研究紀要』第102号 244-231)

(3)今後の成果発表

本研究の最終的な成果の公表として、上記の成果と、すでに発表した「響きあうペルソナ:『アリス・イン・ベッド』におけるマーガレット・フラー」(ジェンダー史学会第11回年次大会)と「結婚という装置:フラーからハーストンへ」(『大正大学研究紀要』第100号)も含め、フェミニズムの戦略として「ペルソナ」と「演技」をキーワードに、*Alice in Bed*を基軸として、広くアメリカ文学に視点を拡大してまとめ、書籍のかたちで公表することを計画し、執筆を継続中である。ソクタグが複数のペルソナを登場させることによって、ドルシラ・コーネルの説く「イマジナリーな領域」を文学的に実現しようとしていることを多角的に論じ、その論点からヘミングウェイやホーソーンが描いた女性たちの声を探し、新たな読解の可能性を示したいと考えている。